ていた。
後日解ったが彼等こそ特別攻撃隊員（特攻隊）であったのだ。彼等は特攻機に乗り出動する前の最後の数日間家族的なぬくもりの中で過ごさせてあげる配慮からの寄宿であったと思う。そんな運命にいる人達とは予想も出来ぬほどの明るく楽しい人達に見えた。
私が特に気付いて印象に残ったのは彼等が大切そうに持っていた白い長いマフラーであった。彼等の説明に依ると万一海に落ちた時にサメに喰い殺されない様にマフラーを巻いた身体を長く見せるとサメの習性で自分より大きい物には絶対に向って来ないので助かるんだと笑いながら話してくれた。
しかし、彼等の特攻機は片道のガソリンのみで目的は敵艦に体当りするのだから生還することは全くない。私には面白く答えてくれただけであった。頂度同じ年頃の私の兄も出征中であったので兄を想い出し悲しくなった。
いろんな方言が交って優しい眼をしていた未だ少年の顔の幼い感じを残す人達ばかりであったので小さな私と話してくれたのだろう。それ以来、ニュース映画や報道等で見る特攻隊員のあの飛行服と首に巻いた白い絹のマフラーの格好良さに憧れをもっていた。
我が家で毎日世話している蚕の繭もやがてあの白い絹のマフラーになるだろうと張り切って飼った。それ以後あの兵士達は二度と帰らぬ人となってしまったが、私の家に数日間づつ泊って私に素晴らしい想い出を残こしてくれたあの人達に感謝し、お世話出来たことを家族全員が我が家の自慢として喜こんでいた。
いよいよ敗戦の二十年八月
総てをこの戦いで日本の主要都市は焦土と化し廃墟と化した。
家族を失い、帰る家もなく身も心も荒廃し今日一日をどう生きるかも解らない人々が、巷に溢れていた。
戦災孤児　病人　怪我人　失業者
……
この状態から果して日本の再建があり得るのだろうか。無から有が生まれるだろうか。しかし残酷な戦いに耐え貫いて来た日本人には想像も出来ないほどの生命力が潜んでいた。
焼け跡の煙の消えない内に最早復興の兆が見え始め日本全体に槌音（つちおと）がなり響き始めた。
私の住む大分市も焼け跡に建つ闇